

司式: 橋本 義武

奏楽: 中井喜久子

前奏: 「我み神より離れまじ」(J.S.バッハ)

招詞: 主は多くの民の争いを裁き、はるか遠くまでも、強い国々を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げずもはや戦うことを学ばない。(ミカ 4:3)

讚美歌 17「聖なる主の美しさ」と

交読詩編 107:17-32

- 17 彼らは、無知であり、背きと罪の道のために/屈従する身になった。
- 18 どの食べ物も彼らの喉には忌むべきもので/彼らは死の門に近づいた。
- 19 苦難の中から主に助けを求めて叫ぶと/主は彼らの苦しみに救いを与えられた。
- 20 主は御言葉を遣わして彼らを癒し/破滅から彼らを救い出された。
- 21 主に感謝せよ。主は慈しみ深く/人の子らに驚くべき御業を成し遂げられる。
- 22 感謝のいけにえをささげ/御業を語り伝え、喜び歌え。
- 23 彼らは、海に船を出し/大海を渡って商う者となった。
- 24 彼らは深い淵で主の御業を/驚くべき御業を見た。
- 25 主は仰せによって嵐を起こし/波を高くされたので
- 26 彼らは天に上り、深淵に下り/苦難に魂は溶け
- 27 酔った人のようによめき、揺らぎ/どのような知恵も呑み込まれてしまった。
- 28 苦難の中から主に助けを求めて叫ぶと/主は彼らを苦しみから導き出された。
- 29 主は嵐に働きかけて沈黙させられたので/波はおさまった。
- 30 彼らは波が静まったので喜び祝い/望みの港に導かれて行った。
- 31 主に感謝せよ。主は慈しみ深く/人の子らに驚くべき御業を成し遂げられる。
- 32 民の集会で主をあがめよ。長老の集いで主を賛美せよ。

レビ記 13:45-46

- 45 重い皮膚病にかかっている患者は、衣服を裂き、髪をほどき、口ひげを覆い、「わたしは汚れた者です。汚れた者です」と呼ばわらねばならない。
- 46 この症状があるかぎり、その人は汚れている。その人は独りで宿営の外に住まねばならない。

マタイによる福音書 8:1-13

◆重い皮膚病を患っている人をいやす

- 01 イエスが山を下りられると、大勢の群衆が従った。
- 02 すると、一人の重い皮膚病を患っている人がイエスに近寄り、ひれ伏して、「主よ、御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と言った。
- 03 イエスが手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい。清くなれ」と言われると、たちまち、重い皮膚病は清くなった。
- 04 イエスはその人に言われた。「だれにも話さないように気をつけなさい。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めた供え物を献げて、人々に証明しなさい。」

◆百人隊長の僕をいやす

- 05 さて、イエスがカファルナウムに入られると、一人の百人隊長が近づいて来て懇願し、
- 06 「主よ、わたしの僕が中風で家に寝込んで、ひどく苦しんでいます」と言った。
- 07 そこでイエスは、「わたしが行って、いやしてあげよう」と言われた。
- 08 すると、百人隊長は答えた。「主よ、わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ただ、ひと言おっしゃってください。そうすれば、わたしの

僕はいやされます。

09 わたしも権威の下にある者ですが、わたしの下には兵隊がおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また、部下に『これをしろ』と言えば、そのとおりにします。」

10 イエスはこれを聞いて感心し、従っていた人々に言われた。「はっきりしておく。イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない。

11 言うておろが、いつか、東や西から大勢の人が来て、天の国でアブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席に着く。

12 だが、御国の子らは、外の暗闇に追い出される。そこで泣きわめいて歯ざりするだろう。」

13 そして、百人隊長に言われた。「帰らなさい。あなたが信じたとおりになるように。」ちょうどそのとき、僕の病気はいやされた。

祈祷

父なる神さま、聖名を賛美致します。この朝、私たち、共に御前に集い、あなたに礼拝を献げることを赦されましたこと、心より感謝致します。どうか、私たちが、私たちの罪を悔い改め、砕かれて、あなたの御言葉の前に、跪き、心を開き、御言葉を確かに聞くことができますように、どうかお導ください。語られる先生を、どうか、強めてください。

8月のこの時期、平和のことを特に思う時であります。世界では戦争があり、また新たな戦争への不安に怯える人たちがいて、私たちは、あなたの前に罪を告白し、そして、平和に至る道を、あなたに示されることを待ち望み、また、あなたの導きに従うことを乞い求めます。どうか私共は哀れんで、平和の道に導いてくださいますように。

イエスさまの聖名よって祈りいたします。アーメン。

讚美歌 456「わが魂を愛するイエスよ」

講壇「キリストの言葉といやし」 佃 雅之

朗読されました『マタイによる福音書』の8章は、「イエスが山を下りられると、大勢の群衆が従った」という場面転換を告げる言葉から始まります。キリストは5章のはじめに「山に登り」、7章の終りまで、弟子たちに多くの教えを語られました。山上からキリストが語られたことは弟子としての生き方です。弟子たちは、キリストの教えを、聴いて行うことを通して、日々の生活の中で、天の父の御心を行う者とならなければなりません。キリストが弟子たちに求められたことは、天の父に対する信頼、つまり、信仰を持つ、ということです。説教を語り終えられたキリストは、ご自身が語られた言葉を行動によって示して行きます。山を下りられたキリストと最初に出会ったのは、「重い皮膚病を患っている人」(レビ13:45「ツァーラ」(צַרַּר) [発疹ができる]、同70人訳 & マタ8:2「レプロシ」(λεπρός)でした。

聖書の翻訳は時代と共に訳が変えられています。「らい病」と訳されている聖書もありますし、新しく翻訳された聖書協会共同訳では、「規定の病」と書かれています。旧約聖書の『レビ記』13章から14章に「重い皮膚病を患った者」への詳しい規定、接し方、生活の仕方が書かれています。今日は、その中の一節を読んでいただきました。

この病は、当時のイスラエルでは非常に大変なことでされていました。この病気にかかったものは、「汚れた者」と見做され、神の祝福から除外された者として町の外に追い出されてしまうのです。「重い皮膚病の人は、衣服を裂き、髪をほどき、口髭を覆い」(レビ13:45)、つまり、一目で病人と分かる身なりを

して、「わたしは汚れた者です」(同)と言って、誰も近づかないようにしなければなりません。そのような彼が、「イエスに近寄り、ひれ伏した」と書かれています。キリストを囲む群衆を割って、一步踏み出してキリスト拜んだのです。そして、彼は、「主よ、御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と言いました。この重い皮膚病の人は、自分の惨めさや辛さを訴えることもできたはずですが、「私はこんなに辛い思いをしています、こんなに孤独です、何とかしてください」と言うことのほうが自然でしょう。しかし、彼は、自分の望みを押し付けませんでした。キリストを完全に信頼して、「御心ならば」、つまり、「あなたがお望みになるなら、あなたは私を、清くすることができる」と言ったのです。病の癒し、奇蹟の御業というものは、主のご意志によってのみ与えられることを知っていたからです。「あなたが望まれるなら、おできになる」ということは、癒されるかどうか、その結果を「すべて主に委ねる」ということです。キリストはその言葉を聞き、手を差し伸べて、彼に触れられました。「誰も触れようとしない、触れてはいけない」とされている人に、触れられたのです。キリストは言われました、「よろしい。清くなれ」、直訳は「わたしは望む。清くされよ。」です。こうして彼は、キリストを信じることで新しい命を与えられた人です。病から癒された彼に、キリストが語ります。「だれにも話さないように気をつけなさい」。キリストは癒された人から、感謝されることも、賞賛されることも求めず、沈黙することを求められています。『山上の説教』の中で、「断食も、祈りも、善行も隠れて行いなさい。右手のすることを左手に知らせてはならない。」と教えられていました。自分の善き行いを徹底的に隠すことは、キリストご自身が『山上の説教』で語られたことです。そして、彼に、「祭司のところに行って見せよ」、命じられます。キリストは父なる神がモーセに与えた律法を大切に扱われます。『レビ記』の規定にある通り、この人を共同体の中に正式に戻すための手続きです。神の民の一員として、新たな歩みを始めさせるためでした。全ての人が、「神を見て、新しく生きる」ということがキリストの願いです。それがキリストのご意志であり、御心であるからです。

先週の講壇で笠原牧師が取り次いだ言葉で言えば、このときキリストは、「正義を行った」のです。聖書の中で言われている「正義」とは、元々、〈一定の生活状態に適用すること〉という意味を持っています。「正義を行う」ということは、共同体の一人ひとりが、本来の姿のまま尊重され擁護されることとなります。聖書が教えている『癒し』の目的は、律法によって、人を締め出すのではなく、本来の生活に戻すことです。このことは、キリストが『山上の説教』の中で、「わたしが来たのは、律法や預言者を廃止するためではなく、完成するためである。神の義を、神の正義を実現するためである。」と語られた教えの実行であります。

次にキリストが出会われたのは「百人隊長」でした。彼はユダヤ人ではなく、ローマの軍人、異邦人です。ユダヤ人から見れば、「百人隊長」も「汚れた者」であり、神の約束から遠く離れている「救い」から最も遠い存在です。しかも、敵対的な支配者の立場にある人物でした。「百人隊長」は、自分の僕が病で苦しんでいることをキリストに近づいて訴えました。彼もまた、キリストに向かって一步踏み出した人です。キリストは、「わたしが行って、いやしてあげよう」と応えられました。しかし、「百人隊長」はこう言います、「主よ、わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ただ、ひと言おっしゃってください。そうすれば、わたしの僕はいやされます。」この「百人隊長」の応えに、謙遜な深い信仰が見えます。「人間にはできないことをこの方ならおできになる

と「百人隊長」は感じ取っているのです。彼は、「人は地位や身分、あるいは、自分の力で生きているのではなく、もっと大きな力によって生かされている」ということを知っていました。ですから、彼はキリストに、「来てください」とは言わず、ただ一言、「おっしゃってください」、「御言葉をください」と願ったのであります。

ここに、二つの大切な信仰が込められています。一つは、自分がキリストを迎えるに相応しくない者だと認める謙遜な心、もう一つは、キリストの言葉には力があると信じていた、ということです。

「百人隊長」はさらに言います、「わたしも権威の下にある者ですが、わたしの下には兵隊がおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また、部下に『これをしろ』と言えば、そのとおりにします。」

「百人隊長」は、キリストに何を伝えようとしているのでしょうか。軍隊においては、上官の権威、ここでは具体的に、上官の発する言葉は絶対です。一人に命じれば百人がその命令に従います。しかし、彼は、決して自分を偉い者だと言いたいわけではないのです。自分の権威は限られたものであり、軍を離れば一切通用しない権威であるということを知っています。しかし、神の力においては、時間も空間的な距離も問題にならない。神の言葉の力は人間の目には計り知れないことを彼は理解しています。キリストの言葉への絶対的な信頼です。キリストの言葉への信頼は、キリストを地上にお遣わしになった父なる神への信頼でもあります。

キリストはこれを聞いて感心して、「これほどの信仰を見たことがない」と、言われました。私たちは、彼らのように、キリストの言葉の力を、いつも信じているのでしょうか、もう祈っても無駄だ、状況は変わらないと、諦めてしまうようなことは無いでしょうか。キリストは私たち一人ひとりの心を見ておられます。この世の常識や偏見を超えて、一人ひとりの信仰を見ておられるのです。「百人隊長」のように、ただ、一言、「御言葉をください」と祈り求める信仰を、私たちは今こそ新たに主から戴かなければなりません。

今日、与えられた二つの物語は、キリストがイスラエルの民の外に、謂わば、教会の外に信仰を発見されるという物語です。「重い皮膚病の人は」、「主よ、み心ならば、私を清くすることがおできになります」と言い、「百人隊長」は、「ただ一言おっしゃってください」と御言葉を求めました。彼らは、全てをキリストに委ねたのです。群衆をかき分けて近づき、全てを注ぎ出して、全てを委ねた時、彼らが願っていた『癒し』がもたらされました。信仰とはキリストと一つになることです。信仰において、主と一つになった時、望んでいた『癒し』が実現するのです。

福音書記者マタイは、なぜ、この二つの物語を、『山上の説教』の直後に、書き記したのでしょうか。マタイはいつも御言葉を聴いている者たちではなく、教会の外の人たちがキリストの教えに信仰をもって応答しているという出来事を通して、教会に警告を発しているのです。生まれた時から当たり前の事のように、あるいは長い間教会に属している者たちに対して、「あなたの信仰は情性となっていないか」と注意を促しています。私たちは、蓄えた知識に満足して、今日、新しくキリストの言葉を頂き、「聴いて行う」という姿勢を失ってはいないでしょうか。私たちは、この今日の礼拝を、「重い皮膚病を患った人」や「百人隊長」のように、何としましても、キリストに近づきたいという強い思いを持って臨んでいるでしょうか。

12節では、「御国の子ら」と呼ばれているユダヤ人たちが、「神の食卓から追い

出され、救いを受けることができず、泣き叫ぶことになる”と語られています。なぜでしょうか、それは、アブラハムの子孫として生まれたということが、必ずしも救いの補償にはならないからです。確かにアブラハムは信仰の出発点となった人物ですが、彼自身も、或る日、突然、神と出会いました。それは特別な条件を満たしていたからではなく、ただ神の招きによることでした。同じように、アブラハムの子であるイサクも、その息子のヤコブも、夫々が個別の出来事として、神と出会っています。親子だから自然に信仰が受け継がれたわけではないのです。ここでキリストが、アブラハム、イサク、ヤコブと、一人ひとりの名前を呼んでいるのは、まさにそのことを示しています。信仰とは、親から自動的に受け継ぐものではなく、一人ひとりが神と出会い、御言葉を聞き、それに応えていく中で与えられるものであるからです。信仰とは、個人の決断と応答によってのみ成り立つものであることを、今日の箇所は私たちに力強く語りかけています。

信仰というものは、洗礼によって完成するものでも、自動更新されるものでもありません。礼拝を大切に、主の毎日に御言葉を頂いて、その御言葉に応え続ける生活の中で守られてゆくものです。私たちに、日々の歩みのあらゆる場面において、神の声に耳を傾け、応え続けていくことが求められています。

今日の箇所の最後で、キリストはこう言われます。「帰きなさい。あなたが信じたとおりになるように。」ここで使われている、「帰きなさい」は、「出発しなさい」ということで、「さあ、行きなさい。」と訳されている聖書(新改訳3版2004)もあります。これは、教会への、私たち一人ひとりへの派遣の言葉です。そして、「あなたが信じたとおりになるように」と、キリストは言われました。「とおりになる」という言葉は、とても深い意味があります。それは、“神の救いの出来事が私たちの生活の中に実際に起こる。”ということです。

私たちが、夫々に、心が折れそうになる悩みや体の痛み、不安を抱えて生きています。「重い皮膚病の人」と「百人隊長」は、キリストを信じる信仰によって、実際に『癒し』を経験しました。今の私たちは、彼らよりも、さらに大きな恵みを受けています。それは、主キリストご自身の命による救いです。十字架に死んで復活されたキリストの命の霊が私たちの内に新しい命として吹き込まれています。主は、今日もこう語っておられます。“よろしい、清くなれ。さあ、行きなさい。あなたが信じたことが起こる。”この御言葉が、私たちが新しく活かすのです。

教会は、キリストの御言葉を分ち合う場所です。私たちは、御言葉によって活かされ、癒され、回復し、そして一人でも多くの人に、その御言葉を届ける器とされています。これからの時代、教会は益々、『癒し』の共同体、言葉が力となる場としての使命が求められています。私たちは、御言葉によって癒された者として、御言葉によって新しい命を与えられた者として、キリストとの出会いを必要としている人のところへ、“御心なるように、信じたことが実現しますように”、と祈りながら、歩み出して参りましょう。

お祈り致します。

聖なる神、私たちを、あなたの子としてください。あなたを信じる者としてください。キリストの言葉が私たちの心に深く刻み付けられますように聖霊が私たちのうちに宿ってください。

主よ、御心なら、私たちを生かし、用いて、あなたの福音を宣べ伝える者としてください。

私たちの主よ、この教会には、ライブ配信によってでなければ、礼拝に与ることのできない兄弟姉妹たちもおります。今、離れた所にいる者をも、あなたの御言葉と癒しの業によってお守りください。

主の聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌 564「イエスは委ねられる」

献金・感謝・主の祈り(堀口恵美)

聖なる父なる御神さま。8月の第3の聖日、あなたが全てを整えてくださって教会集い、またライブ配信で礼拝に与ることができました恵みを、心より感謝申し上げます。佃先生の説教を通して豊かに御言葉を頂くことができました。どうぞ、この暑い夏ではありますけれども、また平和について考える時ではありますけれども、私たち、この御言葉を糧にして、この1週間も“地に平和がなるように”と祈りつつ、日々歩むことができる者とさせていただきます。

私たちは必要な物を全てあなたから与えられています。今、その中から献身と感謝の徴として、ここにお献げ致しました。どうぞ教会の御用のためにお使いください。あなたが私たちに教えてくださいました『主の祈り』を共に祈り、この1週間も、雄々しく歩み出すことができる者とさせていただきます。…「主の祈り」アーメン。

派遣・讃美歌 88「心に愛を」

祝福：主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたが一同と共にあるように。アーメン。

報告：週報追記 聖歌隊土曜練習 26 日出13:30-16:00 於：集會室

後奏：「いと高き神にのみ栄光あれ」(G. ベーム)